福岡県生活安全課

性暴力対策アドバイザー授業の手引きの事例の取扱いについて

福岡県性暴力対策アドバイザー授業のテキストでは、中学校と高等学校において、事例を取り扱うこととしています。

事例を通して、中学校においては性暴力が起こる背景について、高等学校においては被害後の影響や二次被害について理解を深めることを目的としています。

テキストで取り扱う事例については、侵襲性が高いという特徴があることを考慮し、被害に遭われた方の回復の兆しがみえたところで終話としています。また、アドバイザーは、事例を共有した後にはリラクセーションを取り入れるなど、子どもたちが安堵感や安心感を得ながら授業を受けられるように心掛けています。

なお、テキストで取り扱っている事例については、架空のものであること、また、性暴力の被害者／加害者に性差はないことを申し添えます。

この授業を受ける児童生徒に限らず、性暴力被害に遭われた方等には、性暴力被害の詳細について具体的に触れることでフラッシュバック等が引き起こされる可能性があります。

このため、注意喚起せずに事例を出すこと、事例の一部を切り取って被害者を責めるような防犯の呼びかけに利用することなどは適切ではありません。また、事例の内容も架空のものであることから実際にあったこととして扱うことがないよう、事例の取扱いについては特に御留意ください。

【ポイント】
到達目標
性暴力は権利の侵害であることを知る。

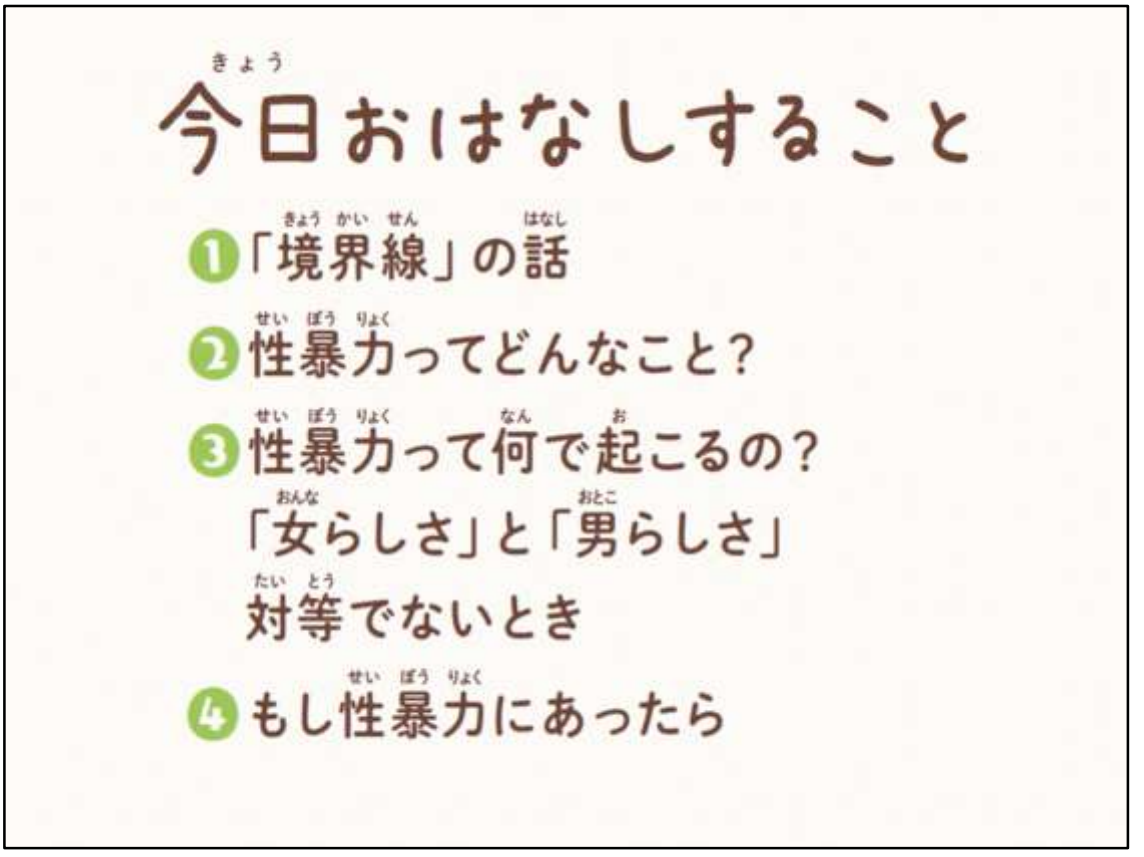
中学校での性暴力は、加害者に優位性がある状況での被害が多く、生徒間での性暴力も増加する。また、ネットアクセスが容易になりSNS等を介した被害も発生する。被害が増える一方で、大人に相談するのが難しくなりやすく、一人で抱え込むことがある。ここでは性暴力や性的同意、性暴力が起こる背景についても学び、自分が被害にあった場合の対処の方法を考える。

1. 何が性暴力かを知る
被害にあったときに「これは性暴力だ」と気付けるようになる。
ネットやアダルトサイト、マンガなどからの偏った情報でなく、正しい知識を得る。
性暴力の形は多岐にわたることを理解する。

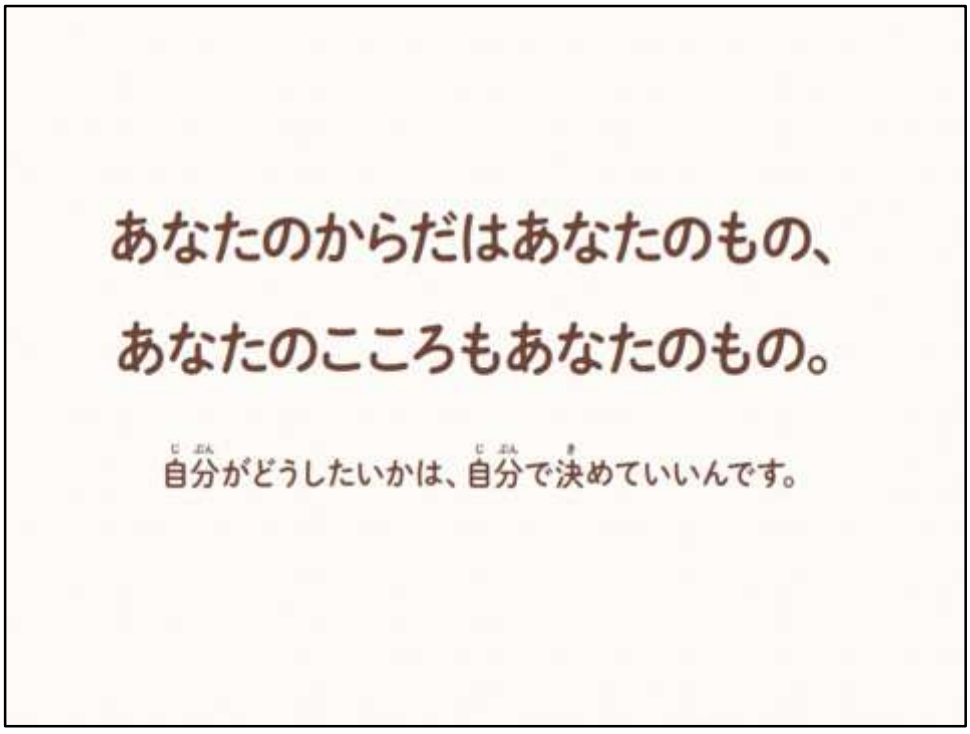
2. 性的同意について考える
性暴力の被害者にも加害者にもならないために、相手を支配するのではなく、互いを尊重し、違いを認め合うことが必要であることを学ぶ。

ジェンダーと性暴力の関係や、対等性などの性暴力の背景を知ったうえで、境界線と境界線をこえるときの確認（同意）を考え、性暴力がなぜ暴力であり、人権侵害であるのか理解を促す。
加害者に優位性がある状況での被害だけでなく、生徒間での被害も増えてくる。
刑法上の性交同意年齢である１３歳に達する。（※本授業で示す「同意」とは定義が異なる）

３．信頼できる大人に話すことができること（権利）を知る
自分から大人に相談することは難しい。被害の影響や、被害以前からの経験により、子ども自身「相談してはいけない、自分に守られる価値がない」と思っていることがある。
被害時に相談してほしいという大人側の思いについては、それを強要・指示するようなニュアンスでは逆効果になる。また、子どもが相談できないとき、周囲の大人の側に原因があることが多い。これらの理由から、大人への相談（被害経験の開示）を、子どもたちがするもしないも選ぶことのできる「権利」として伝えていく。子どもの権利条約に基づき子どもは皆、大人から守られる権利を持つ。このパートは、上記内容について、間接的に授業実施校の職員への示唆も意図している。



【ポイント】
あらかじめ授業の全体の流れを示しておくことで、流れの意図が伝わりやすいように。

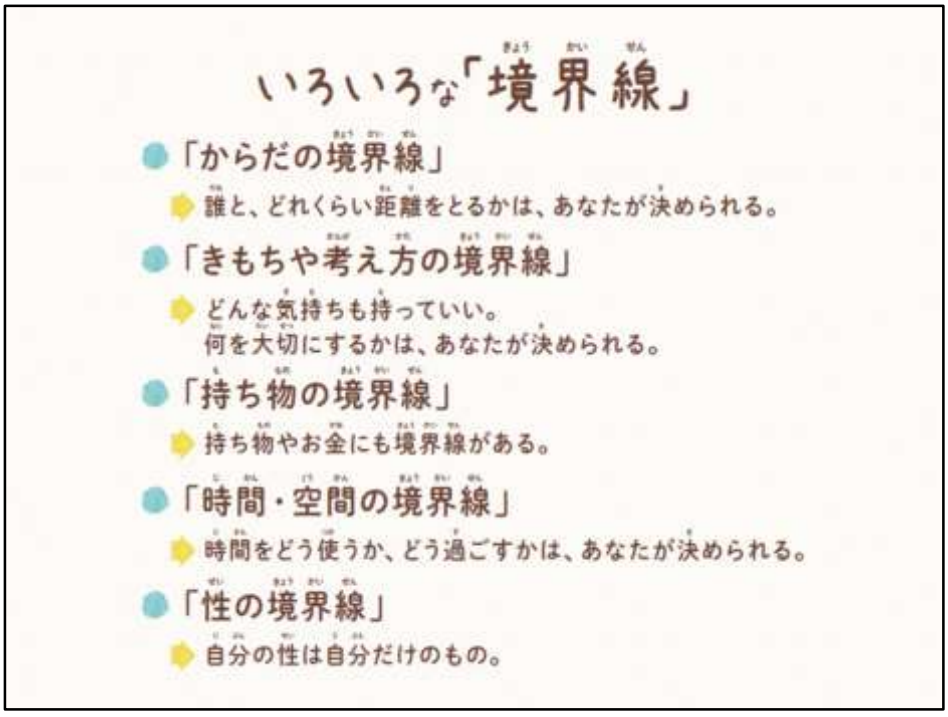


【ポイント】
本授業の基本となる考え方を伝える。
なぜ境界線の概念が役に立つのか、の導入となる。
中学生も当事者（被害者、加害者、その関係者になりうる）であることからも、伝えたい。

【留意点】
このスライドのフレーズは、大事なことなので、授業の中で繰り返し伝える。

【ポイント】
動画「境界線ってなに？」を視聴することで、境界線の考え方を、直観的かつ具体的にイメージできるようにする。

【留意点】
もしも動画が見れない場合は、スライドバージョンを使用する（音とスライドが別になるバージョン）
（動画は別添）



【ポイント】
「境界線」の種類を例示することで、目に見えない境界線の概念についてイメージを固めていく。
個人にまつわるいろんなものが大切に扱われるべきものであることを共有する。

【留意点】
それぞれの境界線の侵害例については動画でふれているので、ここであえて例示しないが、子どもたちの反応を見て理解が追いついていないようであれば動画で取り上げた侵害例に立ち戻って言及しても良い。

【ポイント】
「境界線」の学習は小学校高学年で取り扱うが、本制度の試行期間中は知識が習得できていない生徒がいる。
安心や安全を考えるときに共有したいイメージで、性暴力の授業では欠かせない視点であるため復習として再度取り上げる。
境界線の概念を理解することは、自分自身を理解するための手助けになり、性被害・性加害を生まない文化の第一歩となる。

【留意点】
動画が見れた場合はここからは動画の復習をしていく。もしも動画が見れない場合は境界線についてここから説明していく。
「境界線」という感覚や考え方をベースに、以降、性暴力や性的同意の説明を展開していく。

【ポイント】
ワークを通して自分の境界線を知り、その危機（ピンチ）についてアンテナを張るきっかけとする。

【留意点】
・発表の際は、まず先生に発表してもらい安全な枠を感じてもらう。
　先生には打ち合わせなどの段階でワークの意図を伝え、事前に内容を共有しておく。
・生徒が考えてくれたことに対して受容、フィードバックを行っていく。その際、子どもたちの力を信じ、
　エンパワーメントしていくことを忘れない。

【ポイント】
次スライドから性暴力を例示するにあたって必要な概念。

【ポイント】
性的同意について学ぶことは、性暴力の被害者にも加害者にもならないために必要な学びである。境界線を張ることだけではなく、相手の境界線を大事にすること、境界線をこえることができるルールを理解してこそ、性暴力が何かが理解できる。「性の境界線」をこえるときの確認として「性的同意」を説明することで、生徒のイメージのしやすさを狙っている。

2020年現在、刑法上の性的同意年齢は13歳であり、13歳以上であれば性的同意ができるとみなされている。

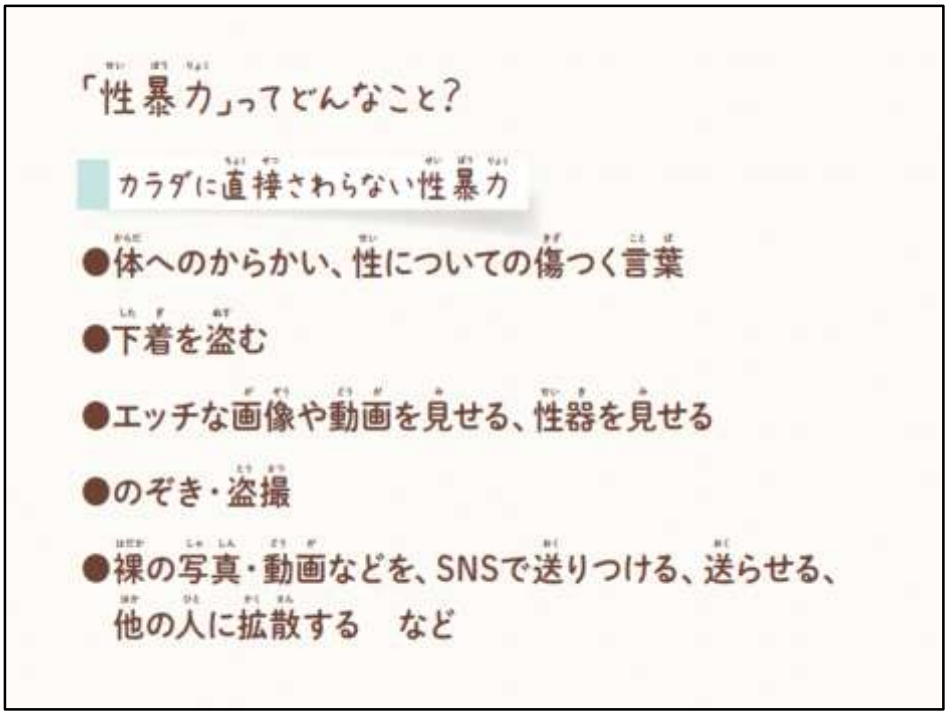
【留意点】
使用する言葉については、学校側と協議しておく。

【ポイント】
◆キースライド（全てのスライドを示す時間がない場合、このスライドを優先的に示す）

性暴力について、事前知識のない子どもにとっては、漠然としていて曖昧なため、この時点では伝わりきれないかもしれないが、大事な定義なのではじめに伝える。
この次から具体例を挙げていく。

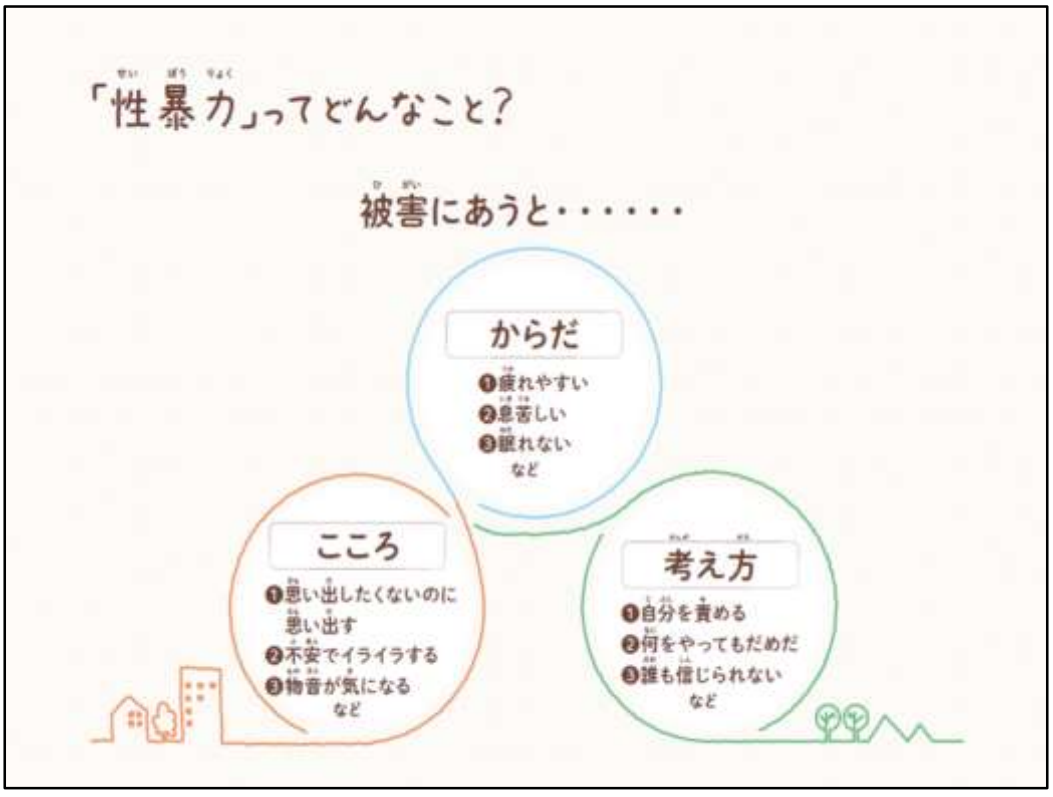
【ポイント】
性暴力がどんなことかを知るために、まずイメージしやすい接触型性暴力を例示する。具体的行為と「暴力」というワードを結びつけることで、身近にある性暴力に気付きやすくなる。

【留意点】
詳しくしすぎず、簡単に説明していく。
子どもにとってわかりやすいように、能動態に統一して伝える。そのため被害というよりも加害行為の例示になる。



【ポイント】
これも性暴力？もしかしたら自分も（無自覚に）加害者になっていたかもしれない、という気付きにつながりやすい。その感覚を共有したい。

【留意点】
子どもにとってわかりやすいように、能動態に統一して伝える。そのため被害というよりも加害行為の例示になる。



【ポイント】
被害の影響として、さまざまな反応が起こることを共有する。
被害者が抱える自責感について、『悪いのは加害者』と明確に伝える必要がある。

「性暴力」ってどんなこと？

被害にあうと・・・・・・

どんな反応が、どのくらい出るかは人それぞれ。

反応が出たとしてもそれは自然なこと。

本人だけでなく、家族や周りの人にも影響が広がることもある。

長期にわたって影響が続くこともある。

【ポイント】
被害後の反応が正常なものであることを知ることで、被害を受けた場合に自らのコントロール感を取り戻す助けになることが期待できる。
また、ひとつの被害がその後に与える影響を知ることで、性暴力を生まない土壌を培っていくことを期待したい。

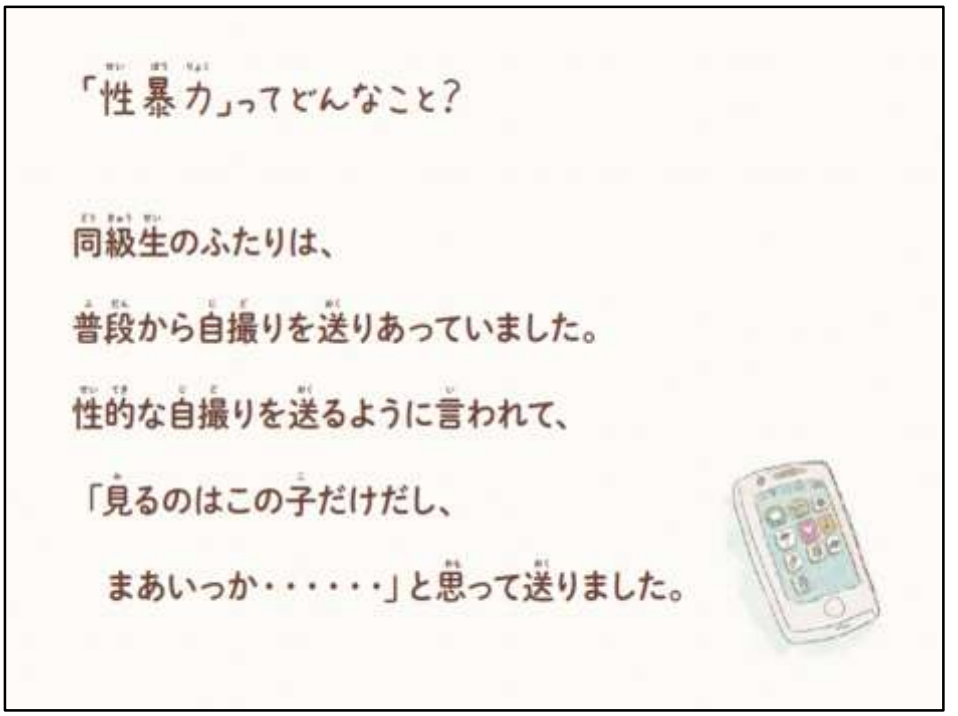
【ポイント】架空事例　ネットと性暴力
ネットアクセスが容易になり、SNSを介した被害が発生している。
性暴力の実態を知るには欠かせない内容である。

【留意点】
次のスライドから、インターネットにまつわる性暴力の事例を３つ用意している。
・自撮り（同級生同士）
・趣味友（SNSで知り合った大人からの被害）
・家出（SNSで知り合った大人からの被害）
各学校のニーズにあわせて、いずれか１例を選んで使用する。
自撮り＞趣味友＞家出、の優先順位で選ぶことを推奨する。
（例えば、自撮りのエピソードと似た事案が発生したことを学校が把握していた場合は、趣味友を選ぶ。趣味友に似た事案があれば、同様に、家出のエピソードを選ぶ。）

各事例の後に、「被害にあった人が悪いんじゃない」という視点を伝える。
ネットの出会い自体を否定しない。（すでにネット上の出会いは子どもにとって一般的になっているため、否定するニュアンスの話者に対して拒否感が生まれる。また、ネット上での出会いによって拠りどころを得ている子ども

も多い。）

侵襲が多いパートに入るので、タイトルスライドでワンクッション置くことで、心の準備をしてもらう。聞けない子どもは教室を出る時間の余地を与える。



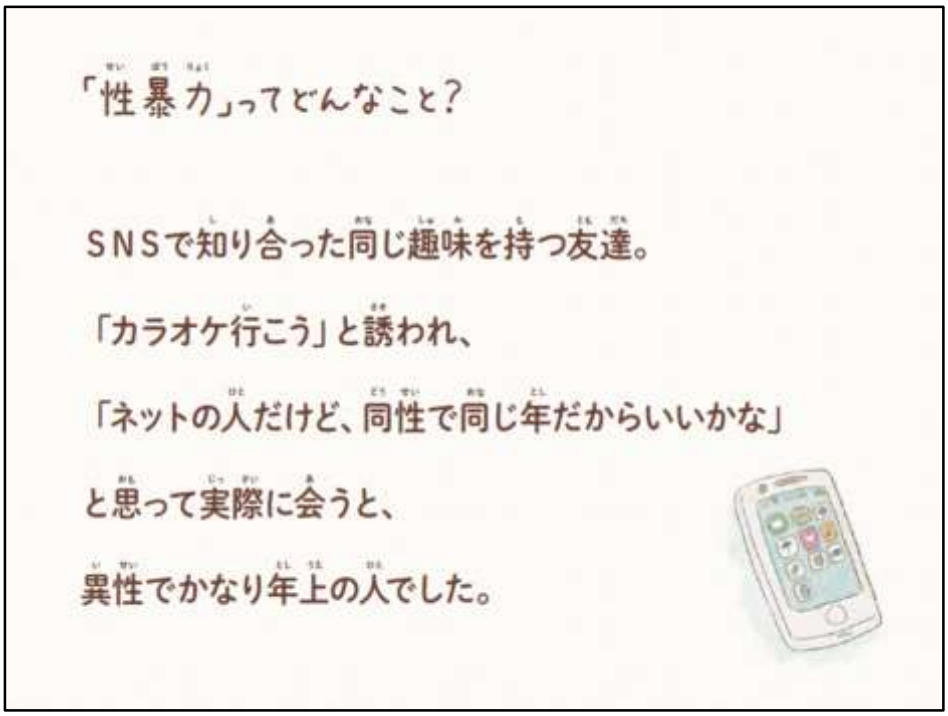
【ポイント】
閉じられた関係性の中での行為はエスカレートしていきやすい。
※他、SNSやインターネットのリスク

【留意点】
手口の紹介になるが、防犯教育の形にはしない。（脅すことが目的ではない）
「自撮りを送った人が悪い」というニュアンスにならないように留意する。
あくまで被害者は悪くない。
男子にも起こりがちな被害内容であるため「被害者＝女性」と植えつけないよう、性差ない形で伝える。
文字にしてしまうと侵襲的なので、結末は口頭でのみ伝える。

【ナレーション案】
「次は下着姿を送って」
と言われ、
「さすがにイヤ」と断りましたが、
「もっと送ってくれないと、バラまくよ」
と、脅されました。

……と、こういうことも起こっています。

このように、気づかないうちに少しずつ……と、二人だけの間だとエスカレートしやすかったりします。
その人だけに見せるつもりで送っても、その人が勝手に他の人に見せたり送ったりしてしまう可能性があります。
また、一度SNSやインターネット上に載せた画像や動画は、見た人が勝手に保存したりなど、あとで消すことが難しくなります。
他にもSNSで知り合った場合は、同じくらいの年や同じ性別だと嘘をついたり、優しくしたり、時間をかけて（信じさせたりして）つながりを持ったりして「この人なら大丈夫」と思わせるのが上手な人がいます。だから「大丈夫」だと思って自撮りを送ってしまうことがあります。それと、急かしたりして、断りづらい気持ちにさせたりしてきます。あなたのペースを考えてくれなかったり、ちょっと強引な気がしたり、「あれ？」と思うときは要注意です。でも、送る人は悪くなくて、送るように言う人が悪いのです。



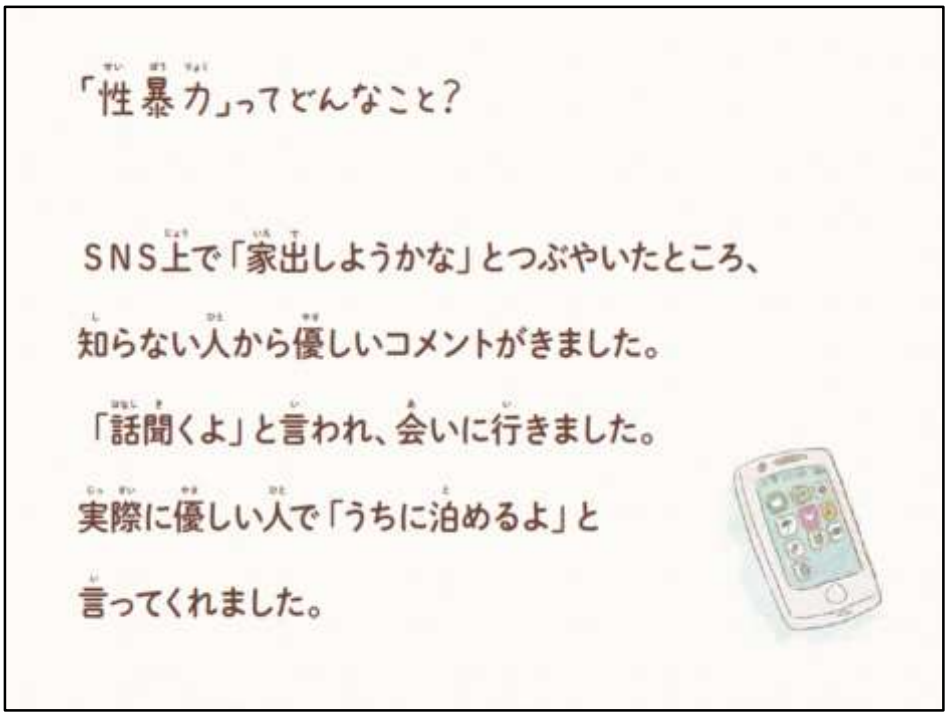
【ポイント】
※他、SNSやインターネットのリスク

【留意点】
手口の紹介になるが、「気をつけろ」的な、脅す形にならないように。
「会いに行った人が悪い」というニュアンスにならないように。あくまで被害者は悪くない。
「被害者＝女性」と植えつけないよう、性差ない形で。
文字にしてしまうと侵襲的なので、結末は口頭でのみ。

【ナレーション案】
そして、被害にあった、ということも起こっています。

このように、相手は計画的でとても巧みな手口を使ってきます。同じくらいの年や同じ性別だと嘘をついたり、優しくしたり、時間をかけて（信じさせたりして）つながりを持ったりして「この人なら大丈夫」と思わせるのが上手な人がいます。だから「大丈夫」だと思って会ってしまうことがあります。それと、急かしたりして、断りづらい気持ちにさせたりしてきます。あなたのペースを考えてくれなかったり、ちょっと強引な気がしたり、初めて実際に会うときにカラオケのような密室に誘うなど……「あれ？」と思うときは

要注意です。でも、会いに行ったことが悪いのではなく、巧みな手口でだます人が悪いのです。



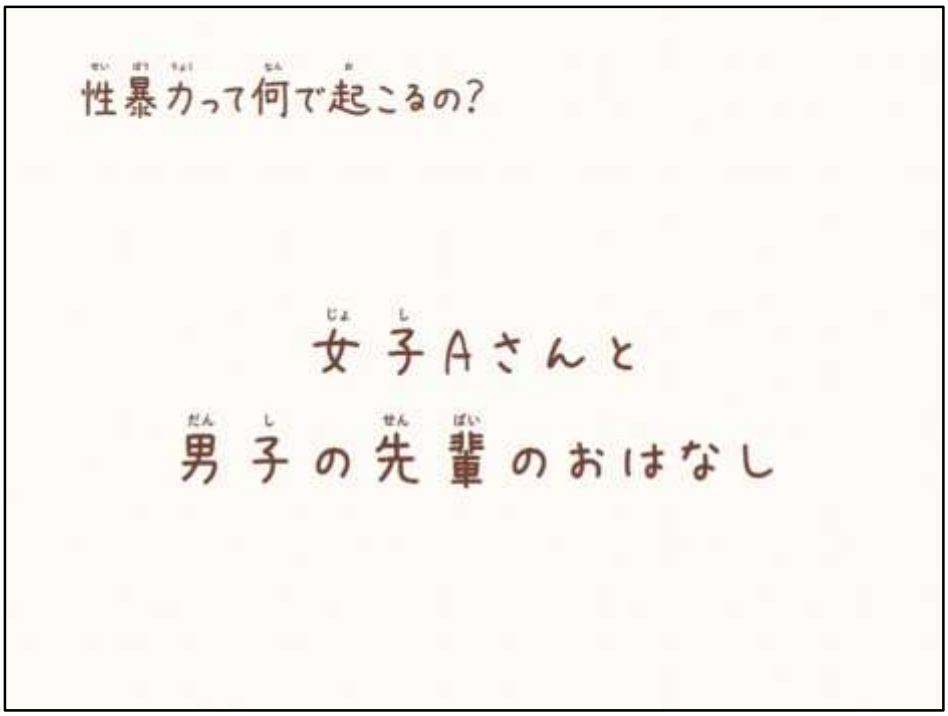
【ポイント】
※他、SNSやインターネットのリスク

【留意点】
手口の紹介になるが、「気をつけろ」的な、脅す形にならないように。
「会いに行った人が悪い」というニュアンスにならないように。あくまで被害者は悪くない。
「被害者＝女性」と植えつけないよう、性差ない形で。
文字にしてしまうと侵襲的なので、結末は口頭でのみ。

【ナレーション案】
そして、被害にあった、ということが起こっています。

このように、相手はとても巧みな手口を使ってきます。優しくしたり、時間をかけて（信じさせたりして）つながりを持ったり、同じくらいの年や同じ性別だと嘘をついたり、「この人なら大丈夫」と思わせるのが上手な人がいます。だから「大丈夫」だと思って会ってしまうことがあります。それと、急かしたりして、断りづらい気持ちにさせたりしてきます。あなたのペースを考えてくれなかったり、ちょっと強引な気がしたり、「あれ？」と思うときは要注意です。でも、会いに行ったことが悪いのではなく、巧みな手口で

だます人が悪いのです。



【ポイント】架空事例　対等でない関係性
性暴力が起きる背景の一つとして、次スライドで示す、非対等性とジェンダーバイアスにつなげるための事例。

【留意点】
次のスライドから、中学生にとって身近な上下関係と関わる性暴力の事例を２つ用意している。
・部活の先輩からの被害
・近所のお兄さんからの被害
各学校のニーズにあわせて、いずれか１例をチョイスする。（実施校で実際に起こったケースに似たものは避ける）

侵襲が多いパートに入るので、タイトルスライドでワンクッション置くことで、心の準備をしてもらう。聞けない子どもは教室を出る時間の余地を与える。

Aさんは部活に入り、毎日楽しく練習していました。

同じポジションの先輩は優しく教えてくれて、

Aさんはめきめきと上達し

先輩のおかげでレギュラーになれました。

でも、

『なんだかちょっと、距離が近すぎるかも…』

Aさんは先輩とふたりきりになるのを

なんとなく避けていました。

「みんなで練習するから、終礼の後残ってて」

先輩にそう言われ、

Aさんはポジションのみんなで先輩に教えてもらう

と思って待っていたら、

他には誰も残っていませんでした。

「どうしてみんな、いないんですか?」

「照れるなよ。おれのこと好きなんだろ」

（ちがう…）

とAさんは言いかけて、でも

（お世話になった先輩に、いやって言えない）

そう思ってためらうと、

先輩はAさんの肩に手を置いてきました。

Aさんは、さわられるのがいやだったけれど、

こわくて動けません。

それからも先輩は

Aさんとふたりきりになろうとしてきます。

Aさんが遠回しに断ると

先輩は不機嫌な態度をとるため、

Aさんは避けづらくなり

ふたりきりの状況になることがありました。

ある日、先輩に強引にキスをされそうになりました。

『他の部員に知られたくない』

『誰かに言ったらおおごとになりそう。

みんなに迷惑掛けたらいけない』

先輩のことについては、

誰にも打ち明けられませんでした。

『イヤって言わなかった自分が悪かったのかな』

『どうしても部活に行けない……

今までがんばってきたのに』

『なんで自分ばっかり』

朝まで眠れない日が続いて、

Aさんは学校を休みがちになりました。

「最近元気ないね。何かあった?」

友達に声をかけられ、

ひとりで抱えることに限界を感じていたAさんは、

初めて先輩のことを友達に打ち明けました。

友達のアドバイスで、

先生に先輩のことを相談することにしました。

『そんなことがあったんだね。

Aさんは悪くないよ。

打ち明けてくれてありがとう』

先生はゆっくり話を聞いてくれて、

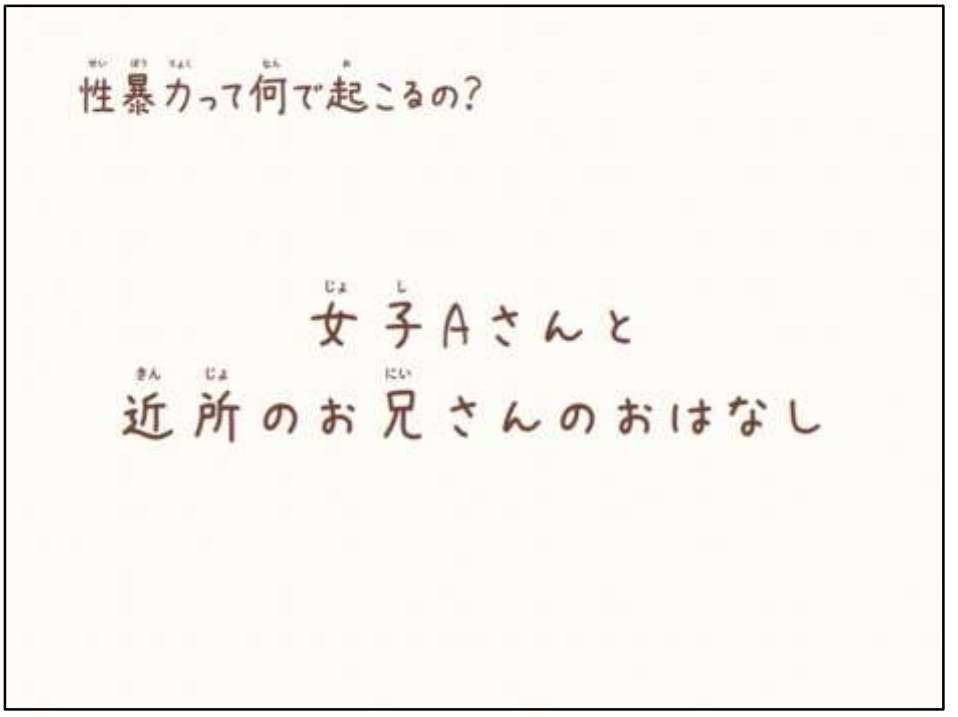
Aさんのことを信じてくれました。

それからAさんは、

スクールカウンセラーに会うようになりました。

気持ちを聞いてもらう中で、

少しずつAさんにほっとする感覚が戻ってきました。



【ポイント】架空事例　対等でない関係性
性暴力が起きる背景の一つとして、次スライドで示す、非対等性とジェンダーバイアスにつなげるための事例。

【留意点】
前の事例のスライドから、中学生にとって身近な上下関係と関わる性暴力の事例を２つ用意している。
各学校のニーズにあわせて、いずれか１例をチョイスする。（実施校で実際に起こったケースに似たものは避ける）

侵襲が多いパートに入るので、タイトルスライドでワンクッション置くことで、心の準備をしてもらう。聞けない子どもは教室を出る時間の余地を与える。

Aさんは中学校に入ってから、

家族のすすめで、近所の幼なじみのお兄さんに勉強を

教えてもらうようになりました。

お兄さんが優しく教えてくれたおかげで、

Aさんは成績が上がってきました。

でも、自宅で勉強を教わっているとき、

『なんだかちょっと、距離が近すぎるかも…』

Aさんはお兄さんとふたりきりになるのを

なんとなく避けるようにしていました。

「期末テスト近いし、追い込みしなきゃね。

次の日曜日、うちでやらない?」

お兄さんにそう言われ、うまく断れなくて

日曜日、お兄さんの家に行きました。

「やっぱり、今日は自分でやるので帰ります」

「照れるなよ。おれのこと好きなんだろ」

（ちがう…）

とAさんは言いかけて、でも

（お世話になったお兄さんに、いやって言えない）

ためらうと、

お兄さんはAさんの肩に手を置いてきました。

Aさんは、さわられるのがいやだったけれど、

こわくて動けません。

それからもお兄さんは

Aさんとふたりきりになろうとしてきます。

Aさんが遠回しに断ると

お兄さんは不機嫌な態度をとるため、

Aさんは避けづらくなり

ふたりきりの状況になることがありました。

ある日、お兄さんに強引にキスをされそうになりました。

『家族に知られたくない』

『誰かに言ったらおおごとになりそう。

家族に心配を掛けたらいけない』

お兄さんのことについては、

誰にも打ち明けられませんでした。

『イヤって言わなかった自分が悪かったのかな』

朝まで眠れない日が続いて、

Aさんはとうとう学校を休むようになりました。

『どうしても学校に行けない……

今までがんばってきたのに』

『なんで自分ばっかり』

なんとか登校できたある日、

担任の先生が声をかけてくれました。

「最近のAさんの様子、心配だよ。

何かあったのなら、話してみない？」

ひとりで抱えることに限界を感じていたAさんは、

初めてお兄さんのことを打ち明けました。

先生はゆっくり話を聞いてくれて、

Aさんのことを信じてくれました。

『そんなことがあったんだね。

Aさんは悪くないよ。

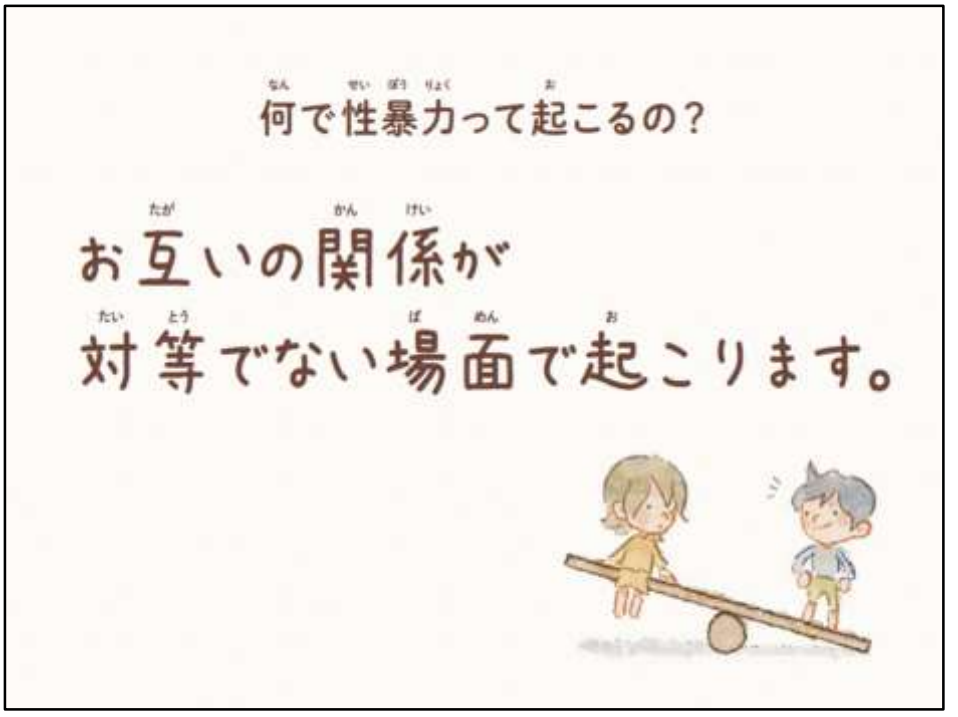
打ち明けてくれてありがとう』

それからAさんは、

スクールカウンセラーに会うようになりました。

気持ちを聞いてもらう中で、

少しずつAさんにほっとする感覚が戻ってきました。



【ポイント】
性暴力が起きる背景の一つとして、非対等性、権力関係がある。
加害者は、力関係（立場、体力、経済力）が上であること（優位性）を利用して、 被害者を信用させたり、あるいは脅したりだましたりすることも多い。
この力関係は、被害者の開示を妨げる要因でもある。

【留意点】
概念的な話に聞こえると理解が難しくなるので、前スライドの事例に立ち戻りながら伝えていく。

【ポイント】
ジェンダーバイアスが加害、被害につながる。
特に男性ジェンダーについて、被害の開示を妨げる。

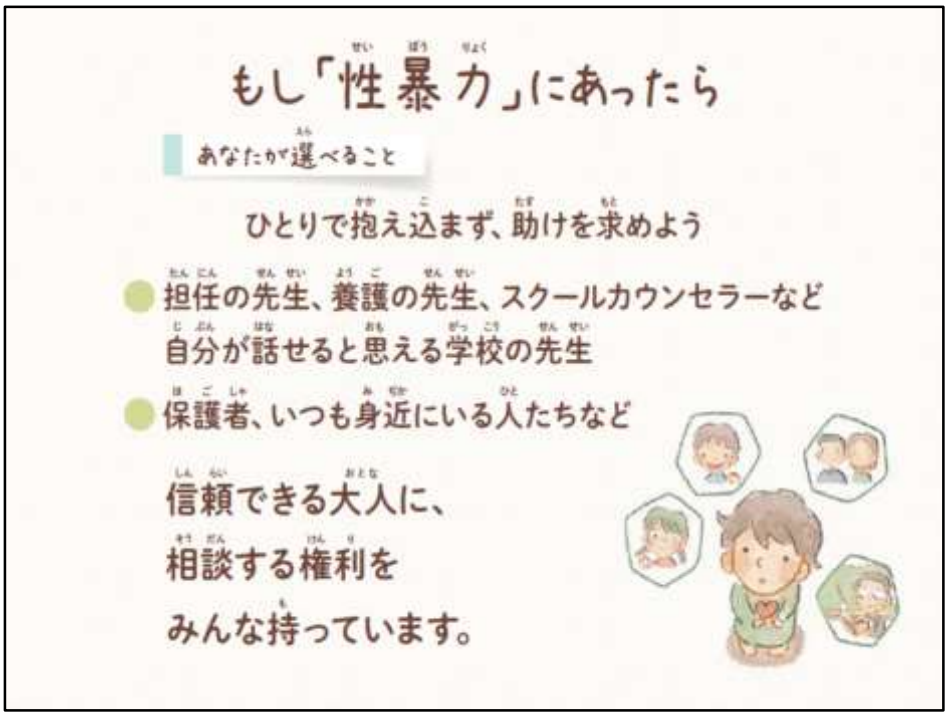
【留意点】
被害にあうのは女性に限らない。

【ポイント】
性暴力を受けたことを認めたくない気持ちや自責感、恥の感覚によって、相談するハードルは高くなる。具体的な対応、相談先、相談したらどうなるか、対処法を考えることで、実際に被害を受けた際に相談しやすくする。同時に被害にあったときの混乱や傷付きを少しでも軽減させる。

【留意点】
被害者は、これらが選べないこともある。できないことを責めないように。選択肢として示すこと。

【ポイント】
身を守ることが最優先。再被害を防ぐ。
同じ加害者からの繰り返しの被害もあるため、連絡に返信しないことが大事になる。

【留意点】
逃げられない状況もあるため、そのフォローもナレ案に含めている。



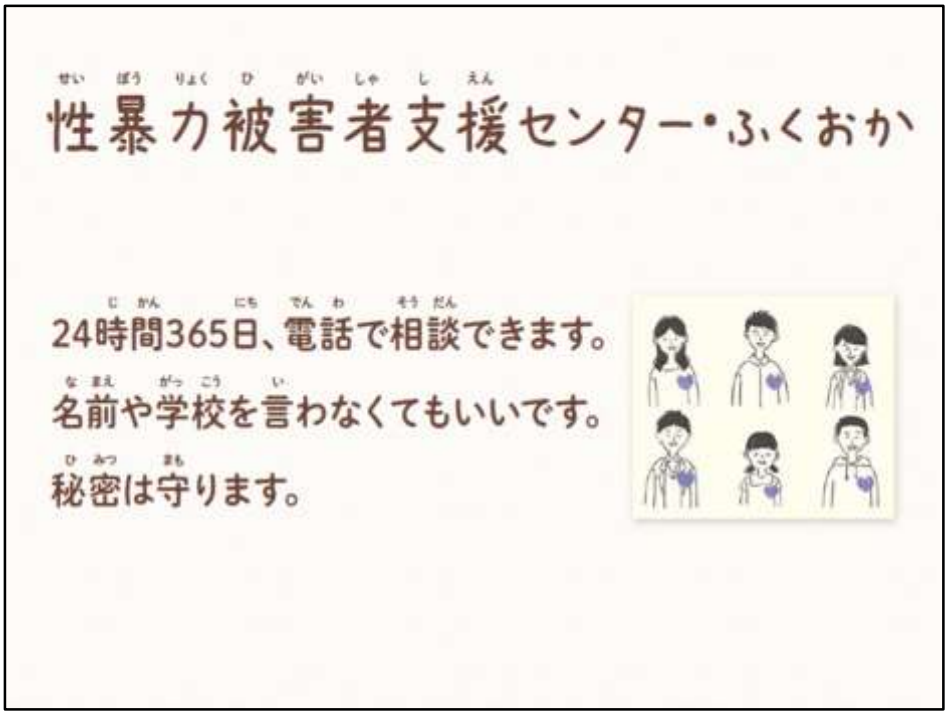
【ポイント】
◆キースライド（全てのスライドを示す時間がない場合、このスライドを優先的に示す。）

ここで例示している大人らは、子どもと近い関係の中で支援が可能な立場であると同時に、境界線（権利）を侵しやすい関係性である。その点を留意すると、学校外の立場であるアドバイザーが「相談する権利」を授業で伝える意義は大きい。
相談や報告を強制・指示するようなニュアンスとならないように。あくまで相談するかしないか、誰に相談するかは子ども自身が選んでよい。

【留意点】
学校関係者が子どもから相談を受けたときの対応について、アドバイザーからの助言・サポートが必要となる可能性あり。

【ポイント】
性被害にあった際の、妊娠の予防も含めた心身を安全に保つための方法を伝えていく。
ケアの方法については、自ら選択していける機会とする。

【留意点】
指示的になったり、脅したり、過度な期待を持たせるような説明は控えること。
例：病院に「行かないといけない」など。
また、妊娠について、「望まない妊娠」という表現は、生まれてくる子どもに対して「望まれなかった子ども」と命を軽くとらえる危惧があるため、より中立的・客観的に状況を表す「予期しない妊娠/計画していない妊娠」などの言葉を使う。



【ポイント】
相談先として性暴力被害者支援センター・ふくおかを紹介する。
センターを相談先として選ぶ際のポイントは、以下の通り。
・どうしたらいいかわからない、どうしたいかわからないときに、とりあえず相談できる。
・身近な大人に話しづらいとき（しがらみのない知らない人のほうが話しやすいことがある）。
・匿名で相談したいとき
・電話で相談したいとき（対面相談よりも顔の見えない電話のほうが話しやすいことがある）。
・２４時間３６５日利用できる。
・被害者本人だけでなく、関係者（被害者の友人や家族、支援者等）も利用できる。

【留意点】
配布しているカードを示す。

- あなたが望まない、同意のない性的な行為や発言はすべて性暴力です。
  - 対等でない関係
  - ○○らしさ
  - 「境界線」のピンチ

- 皆さんは、信頼できる大人に相談する権利を持っています。

あなたのからだはあなたのもの、
あなたのこころもあなたのもの。

【ポイント】
まとめとクロージング。